サーガラ叢書　二十号

真言宗大覚寺派青年教師会

結成三十周年記念特別号

成成開封法会・中日法会

舞楽附大曼荼羅供について

真言宗大覚寺派青年教師会

刊行に際して

真言宗大覚寺派青年教師会　会長
坂口　慈孝

本書は、去る平成三十年戊戌の年に大本山大覚寺で奉修されました、六十年に一度の「勅封般若心経戊戌開封法会」における中日法会「舞楽附大曼荼羅供」を青年教師会で勤めさせて頂いた軌跡を記したものです。

青年教師会といたしまして、お役を全うするべく数年に亘り講習会等を開催し準備をしてまいりました。平成三十年十一月七日、黒沢全紹前門跡猊下が大阿をお勤めになられ、全国から青年教師会の会員四十三名が集まり、諸役に分かれ一丸となって法会を勤めることができましたその一事は、今思い返してみても感慨無量であります。ご関係の皆様方、青年教師会の皆様方のご理解とご協力の賜物であると、衷心より感謝申し上げます。

また、平成三十年は、青年教師会の結成三十周年でもありました。歴代会長をはじめとして役員、会員一同が心をひとつにして歩み、三十年という年月を継いでこられたその歴史と業績には改めて深甚の敬意を表するものであります。

元号が令和となり新しい時代が始まりましたが、青年教師会はこれからも連綿と続き継いでいかれるものと思っております。今後「舞楽附大曼荼羅供」を勤められる折に、また六十年後「勅封般若心経戊戌開封法会」が修されるとき、本書が時の青年教師会の皆様の一助となればと願っております。今後とも当会への様々な方面からのご指導・ご鞭撻を賜りますよう何卒よろしくお願い申し上げます。

末筆ながら、刊行に際し尾池泰道門跡猊下、黒沢全紹前門跡猊下、伊勢俊雄宗務総長より祝辞を頂戴しましたことに深謝申し上げます。

合　掌

目次

・刊行に際して　坂口慈孝……1
・サーガラ叢書発刊に際して　尾池泰道猊下……5
・サーガラ叢書発刊をお祝いして　黒沢全紹猊下……6
・サーガラ叢書・特別号の発刊に寄せて　伊勢俊雄……7
・大曼荼羅供について　伴　泰暁……8
・大曼荼羅供の威儀師を勤めて　黒沢全匡……9
・法会職衆、諸配役……10
・戊戌法会委員会発足から習礼までの日程……11
・準備から当日のスケジュール……12
・真言宗大覚寺派青年教師会戊戌法会委員名簿……14
・舞楽附大曼荼羅供資料……17
・舞楽附大曼荼羅供写真……39
・あとがき　衣巻聡明……46

戊戌開封法会・中日法会　舞楽附大曼荼羅供について

平成30年厳修

嵯峨天皇宸翰
勅封般若心経1200年

戊戌開封法会

いけばな嵯峨御流創流1200年

サーガラ叢書発刊に際して

大本山大覚寺　門跡
真言宗大覚寺派管長
尾池　泰道

サーガラ叢書二十号・真言宗大覚寺派青年教師会結成三十周年記念特別号発刊に際し、一言お祝いを申し上げます。

平素は、本山行事への出仕をはじめ、多岐に亘りご理解とご協力をいただき、心より感謝申し上げます。また、この度のサーガラ叢書発刊に際しては、貴会結成三十周年も同時に迎えるとのこと、重ねてお祝いを申し上げるとともに、これまでのご功績に敬意を表します。

さて、去る平成三十戊戌歳は、嵯峨天皇宸翰勅封般若心経「戊戌開封法会」並びにいけばな嵯峨御流創流一二〇〇年という誠にありがたい勝縁の年でありました。二カ月間という長きに亘っての行事となり、その中日法会には真言宗の中でも大法となる「大曼荼羅供」を貴会が中心となって執行いただきました。正に六十年に一度巡り来る戊戌開封法会の中日法会として、また貴会結成三十周年記念を飾るに相応しい、誠に荘重かつ厳粛なる法会でありました。

今般発刊されましたサーガラ叢書は、その曼荼羅供の集大成として、格別なものではないかと拝察いたします。曼荼羅が示す「相互供養」の教えを基に、これからも青年教師会の皆様が益々ご活躍なされますことを切にお祈りし、意を尽くしませんが、発刊に際しましてのお祝いとさせていただきます。

合　掌

サーガラ叢書発刊をお祝いして

前大本山大覚寺　門跡
前真言宗大覚寺派管長
黒沢　全紹

今般、サーガラ叢書発刊並びに真言宗大覚寺派青年教師会三十周年記念に際し、心よりお慶びを申し上げる次第でございます。

さて、去る平成三十年十一月七日、戊戌開封法会期間中の中日法会として、大覚寺派青年教師会出仕による「舞楽附大曼荼羅供」が奉修されました。小衲も大阿として出仕させていただくこととなり、非常に身の引き締まる思い出深い法会の一つでした。

「大曼荼羅供」とは両部曼荼羅の諸尊を供養する真言宗の中でも大切な儀式であり、その功徳は広大であります。大覚寺での奉修は久しくなかったことから、この度の記念の年にお勤めができましたことは大変ありがたいものでした。

青年教師会の諸師に於かれましては、数年前より準備、講習会等を開催し研鑽を深め、準備万端にて当日を迎えられ、如法にして威儀厳重なる法会を見事につとめられ、その中心に座す感激を味わいつつ、お蔭様で無事に成満することができました。心より感謝申し上げる次第でございます。また、大曼荼羅供奉修後は記念祝賀会も併催し、盛会に行なわれましたこと重ねてお慶び申し上げます。

最後になりますが、三十年という長きに亘って青年教師会を支えてこられた方々に敬意を表しつつ、今後益々の隆盛を願い、祝辞とさせていただきます。

深　謝

サーガラ叢書・特別号の発刊に寄せて

真言宗大覚寺派宗務総長
大本山大覚寺執行長
伊勢　俊雄

当派青年教師会に於かれましては、平素より宗団並びに本山護持発展のために何かとご尽力を賜り、心より厚く御礼申し上げます。また、この度は、サーガラ叢書二十号・当派青年教師会結成三十周年記念特別号の発刊に当たり、一言お祝いの言葉を述べたいと存じます。

今回の主題は、当山が平成三十年に迎えました「戊戌開封法会・中日法会・舞楽附大曼荼羅供」についてでございます。思い返してみますと、青年教師会の皆様のご協力はこの法会だけでなく、啓蒙活動として行われたいけばな嵯峨御流各司所開催の「荘厳華へのいざない」並びに末寺檀信徒への「秘鍵大師ご巡錫」をはじめ、ご開封期間中の各種法会の出仕など数え切れず、この度の戊戌開封法会無魔成満は、青年教師会の皆様のご尽力なくしては成し遂げることはできないものでありました。そして何より、青年教師の皆様のそのみなぎる熱意に深く感動し、頼もしい限りでありました。ありがとうございました。

当山の大きな歴史は一つの節目を越え、我が国の改元と共に新たな歴史へと歩み始めました。これからも青年教師会の皆様には、嵯峨天皇の大御心、お大師様の御教えを基として、地域社会への貢献、教化活動に精進し、祈りを捧げていただきたく存じます。

最後に、当派青年教師会諸師の益々のご健勝とご発展を重ねて祈念申し上げ、発刊に寄せての言葉といたします。

合　掌

大曼荼羅供について

真言宗大覚寺派青年教師会
戊戌法会委員会　委員長　伴　泰暁

大飢饉が起こり、疫病が蔓延し、多くの民が苦しんでいる姿に御心を痛められた嵯峨天皇さまが、弘法大師さまのお勧めにより一字三礼の誠を尽くして般若心経を浄書されてより千二百年。

大覚寺に伝承されてきた「勅封心経戊戌開封法会」の中日法会は舞楽附大曼荼羅供が執行されました。

平成二十八年春、青年教師会はこの法会への出仕をご本山よりお声がけいただき、青年教師会戊戌法会実行委員会を発足いたしました。

大覚寺で大曼荼羅供が執行されるのは実に六十年ぶりということで、青年教師会といたしましては、手探りの中での出発となりましたが、まずは、講習会を開催し、大曼荼羅供について研鑽することとなりました。

講師を関東教区・補陀洛寺住職・黒沢全匡僧正にお願いし、五会にわたりご講義いただきました。講義の中では、大曼荼羅供の意義や意得をはじめ、供物などの荘厳について、声明や作法など事細かくご教授いただきました。

平成三十年初夏には習礼が始まりました。この夏は、暑い日が続き、大きな台風も幾度となく来襲しました。その中において、委員各位が力を合わせ、準備を進めてまいりました。

十一月七日、水のように澄み切った秋空の下、黒沢全紹門跡猊下を御導師に青年教師会が職衆、承仕を勤め「舞楽附大曼荼羅供」は厳修されました。

今、思い返しても胡蝶之夢の如き荘厳な法会でございました。この法会が無魔成満できましたのは、黒沢門跡猊下のお導きをはじめ、大覚寺派諸大徳の皆様の深いご理解と温かいご支援の賜物でございます。委員会を代表し衷心より御礼申し上げます。

また、委員会運営をお支えいただきました青年教師会会員各位にも重ねて御礼申し上げます。願わくは、六十年後の「勅封心経戊戌開封法会」において、青年教師会の方々がご活躍いただけることを切望いたします。末筆になりましたが、青年教師会の益々の繁栄と、会員各位のご健勝を祈念いたします。

大曼荼羅供の威儀師を勤めて

舞楽附大曼荼羅供　威儀師
黒沢　全匡

大覚寺での曼荼羅供は前回の戊戌法会、昭和三十三年以来のものとなります。折しも勅封の般若心経が浄写されて千二百年、青年教師会におかれましては結成三十周年の記念の年に、皆様がこの法会を勤められることは誠に勝縁なことであります。また、私事にも威儀師を勤めさせていただくことは、全くもって奇縁を感じずにいられません。

十年ほど前の平成十九年、中興後宇多法皇の入山記念法会の際にも今回と同じく、結成二十周年を迎える中でご本山より中日法会での理趣三昧の依頼があり、十数年振りの庭儀に講習会、習礼を重ねて勤めたのが、ついこの間のように思えます。その際にまとめた次第や資料が今回の法会に引き継がれ、縁あって威儀師に至ったのだと思いました。

しかしながら今般の法会は大曼荼羅供、法会の規模も作法の複雑さも格段に上です。過去の資料も散逸し、手探りの中で今に残る大覚寺や広沢流の作法に則り、根本から形作っていく必要がありました。正直、多くの困難や不安もありましたが、それを支えて鼓舞してくれたのが青年教師会諸師の若い力であり、漲る熱意が法会の成功に繋がったのだと思います。

できる限りのことは一緒に勉強させていただきましたが、この成功で満足せず、更に素晴らしい法会を目指して研鑽し、大覚寺の大曼荼羅供を作り上げていただきたいと思います。皆様の今後に期待し、この法会に携われたことに感謝申し上げる次第です。

法会職衆、諸配役

大阿闍梨　大本山大覚寺門跡 黒沢全紹 大僧正猊下

啓白文　伊勢俊雄執行長

誦経導師　草津栄晋執行

持金剛衆　坂口慈孝、服部教弘、稲井隆生、松本龍希、羽原清祇、亀田清隆、市橋和幸、塚本雅道、野村昭雄、石本憲正、那須寛永、渡辺亮圓、荒木宣雄、竹原智乗

讃衆　潮崇弘、衣巻聡明、吉武真仰、喜多村龍秀、三好温人、荒木靖雄

庭役　楠野吉弥、楠野彰真、今井大智、三矢涼平、片山泰幸、藤本明大、釈弘紀、泉良顕

雅楽・舞楽　平安雅楽会

威儀師　黒沢全匡

従儀師　田口浩之、片山尊之

承仕　伴泰暁、亀田隆成、黒川浄慧、村上慧仙、熊本龍佑、尾池泰輝、

（教学係長）　藤本浩春

（教学課員）　塚本智道、幡山真大、平井亮至、折野弘龍

（伝灯学院生）　戸村健明、原祥然、田中秀征、角田仁海

十弟子　村上全弘、村上貴徳

随行　徳毛宜顕、藤井宏文

戊戌法会委員会発足から習礼までの日程

・平成二十八年八月
真言宗大覚寺派青年教師会戊戌法会委員会発足
・平成二十九年三月十三日（月）
真言宗大覚寺派青年教師会戊戌法会委員会第一回代表委員会にて戊戌法会委員会の役員について、青年教師会役員による兼任が決定
諸役は以下の通り
委員長：伴　泰暁
副委員長：片山尊之・亀田隆成
開白法会担当責任者：衣巻聡明
中日法会担当責任者：田口浩之
結願法会担当責任者：服部教弘
会　計：荒木靖雄
事務局：竹原智乗・徳毛宜顕
・平成二十九年五月二十四日（水）　午後一時～午後五時
平成二十九年度春期講習会
「大曼荼羅供の作法と解説　第一会」
講師：黒沢全匡僧正　場所：高野山福山別院
・平成二十九年十月十八日（水）　午前十時～午後四時
平成二十九年度秋期講習会
「大曼荼羅供の作法と解説　第二会」
講師：黒沢全匡僧正
場所：リファレンスはかた近代ビル貸会議室
・平成三十年三月十四日（水）　午前十時～午後四時
平成二十九年度特別講習会
「大曼荼羅供の作法と解説　第三会」
講師：黒沢全匡僧正　場所：メルパルク京都
・平成三十年五月二十四日（木）　午後一時～午後四時
平成三十年度春期講習会
「大曼荼羅供の作法と解説　第四会」
講師：黒沢全匡僧正　場所：大本山大覚寺
・平成三十年七月十八日（水）　午前十時～午後四時
平成三十年度特別講習会
「大曼荼羅供の作法と解説　第五会」
講師：黒沢全匡僧正　場所：大本山大覚寺
・平成三十年九月十九日（水）　午前十時～午後四時
習礼　場所：大本山大覚寺

準備から当日のスケジュール

・平成三十年十一月五日（月）集合　準備
・平成三十年十一月六日（火）準備　習礼
・平成三十年十一月七日（水）

午前六時　起床
午前六時三十分　朝勤行
午前八時　最終習礼
午前九時　装束鐘
午前九時十五分　集会鐘
午前九時二十分　披露
午前九時三十分　進列鐘
【奏楽「越殿楽（えてんらく）」】
午前九時四十分　職衆入幔門
【止楽「越殿楽の止楽」】
庭讃
【奏楽「賀殿（かてん）」】
登階
群立
大阿佇立
大阿発願
大阿一切諷誦
職衆読経
職衆止経
大阿神分
【止楽「萬歳楽の止楽」】
堂童子撤分経机
啓白文
唱礼
前讃
普供養・三力
職衆誦咒
大阿振鈴・止咒
後讃
後唱礼
廻向
大阿下礼盤・着新畳台
誦経導師登礼盤
誦経導師三礼・表白
堂達作法

十弟子所作
大阿入堂・登礼盤
【止楽「賀殿の止楽」】
持金剛衆入堂・無言行道
讃衆入堂
総礼
大阿驚覚鈴・法要金
唄
堂童子賦華籠
次第散華・大行道
【奏楽「賀殿」】
【止楽「賀殿の止楽」】
対揚
堂童子撤華籠
大阿開眼
大阿表白
【舞楽「迦陵頻」童舞】
【舞楽「萬歳楽」】
堂童子賦分経机
大阿揚経題

（十二ページ下段へ）

午後〇時四十分

誦経鐘
発願・四弘・仏名・教化
引被物
乞呪願
廻向
還列
【奏楽「賀殿」】
【止楽「賀殿の止楽」】
【奏楽「越殿楽」】
【止楽「越殿楽の止楽」】
解散

真言宗大覚寺派青年教師会戊戌法会委員　名簿

教区	寺院	氏名	配役
関東教区	浄蓮寺	村上慧仙	承仕(預)
関東教区	浄蓮寺	黒川浄慧	承仕(預)
関東教区	本覚寺	村上全弘	十弟子
関東教区	本覚寺	村上貴徳	十弟子
関東教区	星谷寺	三矢涼平	庭役(鐃持)
関東教区	泉光院	泉　良顕	庭役(金棒引)
関東教区	浄泉寺	井上全寛	承仕

教区	寺院	氏名	配役
近畿教区	覚勝院	片山泰幸	庭役(持幡童)
近畿教区	覚勝院	坂口慈孝	持金剛衆(咒願士)
近畿教区	神咒寺	亀田清隆	持金剛衆
近畿教区	善龍院	亀田隆成	承仕(堂童子)
近畿教区	教海寺	衣巻聡明	讃衆(磬打)
近畿教区	成福院	今井大智	庭役(鐃持)
淡路教区	海福寺	潮　崇弘	讃衆(鐃打)
淡路教区	浄瀧寺	市橋和幸	持金剛衆

教区	寺院	氏名	配役
中国教区	十輪院	服部教弘	持金剛衆（唄士）
中国教区	寒水寺	片山尊之	従儀師（堂担当）
中国教区	西光寺	田口浩之	従儀師（庭担当）
中国教区	正覚院	塚本雅道	持金剛衆
中国教区	日光寺	野村昭雄	持金剛衆
中国教区	金鳴寺	徳毛宜顕	随行（大傘）
中国教区	胎蔵寺	竹原智乗	持金剛衆（散華士）
中国教区	長尾寺	藤井宏文	随行（従僧）

教区	寺院	氏名	配役
四国第一教区	観音寺	羽原清祇	持金剛衆
四国第一教区	観自在寺	三好温人	讃衆（相鈸）
四国第一教区	延命寺	尾池泰輝	承仕
徳島教区	西福寺	稲井隆生	持金剛衆
徳島教区	薬師寺	石本憲正	持金剛衆
徳島教区	自性寺	渡辺亮圓	持金剛衆
徳島教区	蓮光寺	荒木宣雄	持金剛衆（散華士）
徳島教区	蓮光寺	荒木靖雄	讃衆（讃頭）

教区	寺院	氏名	配役
福岡教区	観音寺	楠野吉弥	庭役(螺吹)
福岡教区	恵弘寺	吉武真仰	讃衆(鐃打)
福岡教区	観音寺	楠野彰真	庭役(螺吹)
福岡教区	大悲王院	喜多村龍秀	讃衆(堂達)
福岡教区	眞光院	藤本明大	庭役(持幡童)
福岡教区	戒音寺	熊本龍佑	承仕(被物士)
九州第一教区	東光寺	大石隆聖	承仕
九州第一教区	定林寺	黒髪寛哉	承仕

教区	寺院	氏名	配役
九州第一教区	大定寺	松本龍希	持金剛衆
九州第一教区	高野寺	釈　弘紀	庭役(金棒引)
九州第一教区	福生寺	伴　泰暁	承仕(堂童子)
九州第一教区	観蓮寺	那須寛永	持金剛衆

嵯峨天皇宸翰勅封般若心経
一千二百年戊戌開封法会

舞楽附大曼荼羅供　資料

舞楽附大曼荼羅供 解説

装束鐘

承仕は三通三下、半鐘を打ち鳴らし装束を促す。装束鐘を聞き、諸衆装束を着ける。

集会鐘

承仕は巨鐘三打。巨鐘を三度撞き鳴らす。

職衆は右手に桧扇、左手に念珠、金剛杵（讃衆は独鈷無し）を持ち、張文を見て薦次を守り、席札を確認して自席に着く。集会所は駒取座、大阿の左方を上薦とする。着座の後、金剛杵を左袖に入れて桧扇を席札の上（席札なければ両膝の前）に置き、衣紋繕いはせずに少し威儀を整え、音を立てないように念珠を静かに引き、念珠を二匝にして両手で掴み、膝の上に置く。

金棒引・螺吹・鐃持・持幡幢・大傘等は、玄関前の石畳の外側に対向して佇立する。進行順になるように玄関門より金棒引・螺吹以下の順に並ぶ。

迎鐘

今般は古例に倣い、大阿は十弟子・従僧とともに別室で控え、職衆進列の時に従儀師の案内で加列する。よって、迎鐘は打たない。

従僧・十弟子は大阿に従い、十弟子の一薦は据箱、二薦は香呂箱を持ち、大阿の両側に正面を向いて着座する。それぞれ持ち物を膝の前に置き、胸に挿した桧扇を取り出して持ち物の横に置く。

大阿が集会所の座に着かれるならば、承仕は迎鐘一通三下打ち鳴らし、従儀師は大阿を集会所に案内して着座を乞う。

披露

威儀師は念珠を左袖に入れ、膝を立て両手をついて簡潔に披露する。近時は左手に念珠二匝、右手で中啓を立てて披露する。尤も、京都では本来披露は行わない。

進列鐘

従儀師は披露が終われば起座し、一度集会所を出て念珠を左袖に入れ中啓を胸に挿し、従儀師上薦は左方、浅薦は右方の張文を剥がし丸めて懐中、中啓・念珠を持ち元の席へ戻る。

承仕は一通三下。半鐘を打ち鳴らし進列を促す。

威儀師は集会所の敷居一寸程前にて、膝を立て両手をつき「列（乙）、列（甲）」と二声催すれば、職衆は右手に桧扇、左手に念珠、金剛杵を持ち起座、一揖して進列を始める。

従儀師上薦は大阿に案内する。讃頭・相鈸は職衆の先頭に立ち、続いて讃衆・持金剛衆、何れも右左右左と切り込み、浅薦前にて厳重に進行して玄関に至る。

玄関より草履を履き、金棒引、螺吹、従儀師、鐃持と二行に進行、職衆一行、大阿の前に持幡童が二行、大阿の後に従僧、大傘、十弟子二行、最後に威儀師の順で勅使門まで進行する。

今般は堂童子、楽人、舞人は進列に入らず、四官、十弟子三、四薦は役を配さない。また、執蓋、執綱の替わりに大傘を使用する。尚、楽人は宸殿東側の回廊にて奏楽する。

金棒引　螺吹　従儀師二薦・庭　鐃持　讃衆　持金剛衆
金棒引　螺吹　従儀師一薦・堂　鐃持

持幡童　従僧　十弟子二薦・香
持幡童　大阿　大傘　十弟子一薦・据　威儀師

承仕は楽人に奏楽を合図する。楽人は諸衆が勅使門に至り庭讃発音まで奏楽する。

勅使門を入り、従儀師・職衆・大阿・威儀師は草鞋に履き替え、薦の上を進行する。古例には砂地を進行するが、今般は従儀師も草鞋を履く。

承仕は草鞋を差し出して草履を下げる。

その他の諸衆は草履にて、金棒引・螺吹・鐃持は幔門の外側、持幡幢・大傘・従僧・十弟子は薦の間の砂地を進行する。

職衆入幔門

従儀師二人が左右の幔門に至れば、承仕は左右それぞれの幔門の左側の支柱を抜き右側の支柱に括りつけ幔門を撤す。

預は庭机の法螺を螺吹に渡し、続いて鐃鈸を鐃持に渡す。

讃頭は右筵道、相鈸は左筵道に移り、念珠を左袖に入れ桧扇を胸に挿す。庭机にて、鐃持の捧げる鐃鈸に向かい上の鈸を左手、下の鈸を右手で取り、鐃の上で鈸の面を合わせて鈸を少し差し下げ鈸の緒を両肩に懸け、左の手にて横被の端と鈸の端とを取り

具してその下の方を握り、右の手を以て袍の袖を取るが如くにして、鈸の上の方を握り（頭指を両鈸の間に入れて、外の四指で握る）、差し下げる体にして左の脇に挟み、緒が両肩より落ちないよう両肘を張って進行する。

讃衆・持金剛衆も左右の筵道に分かれて進行する。鐃持は棓を鐃打に渡し、鐃の面を鐃打に向けて持ち、筵道の外を携えて進む。大阿が幔門に至れば承仕は幔幕を撤す。

預は玉幡を持幡童に渡す。持幡童の左方は袖をとって左手を上、右手を下にして持ち、右方はこれを反対にして持つ。

大阿は中筵道を進行する。続いて十弟子は砂地、威儀師は左筵道を進行する。諸衆が幔門を通り過ぎれば承仕は庭机を撤し、中幔門のみ元の如く張り置く。

金棒引　螺吹　　鐃持
従儀師　讃衆　持金剛衆
持幡童　従僧　十弟子
大阿
持幡童　大傘　十弟子
従儀師　讃衆　持金剛衆　威儀師
金棒引　螺吹　　鐃持

庭讃

讃衆・持金剛衆が舞楽台の両側に進み、大阿が舞楽台に立たれる（曲禄に座す）を見て、従儀師は気色を示し、従儀師、讃頭・相鈸は対向し、諸衆は行きなりに立ち止まる。

承仕は楽人に止楽を合図し、楽人は奏楽を止める。従儀師は「発音」を催し讃頭は発音。職衆は助音する。讃頭・相鈸は「摩訶夜」の時、鈸を胸の前に出し、右手、左手の順に緒の根の処を取り、唱え終れば鈸三段・反音四ツを突く。

古式は前の如く左脇に挿み反音するも、近時は鈸の面を胸前に合せながら反音発音す。鈸三段、六十九を突くのが本義であるが、今般は鈸三十とする。

反音の鈸四ツ終われば、次に鐃一声、次に螺吹三声、この間に讃頭・相鈸は向きを変える。次に鈸四ツ突・鐃一声・螺吹三声、従儀師は互いに小揖して列を引き進み、諸衆は徐々に進む（二回目の螺声にて職衆は進行）。螺声の間に職衆は三、四歩進み、鈸の声の間に金棒引・螺吹・従儀師は三、四歩を進む。

金棒三引・法螺三声・鈸四ツ突き・鐃一声を繰り返し、除々として進む。金棒引は列の速度を加減し、金棒を三度引いて一度地面を突引きながら進行する。

諸衆が進行を始めれば楽人は発楽、承仕は合図する。楽人は大阿登礼盤まで奏楽する。

登階

道場正面の階下に至れば、金棒引・螺吹・従儀師は筵道の東西に二、三歩避け、対向して佇立する。

従儀師は草鞋着用の故、伝薦の両端に佇立する。

讃頭・相鈸は合わせ鈸の後、鈸を脇に挟み持ち房を両肩に掛け、讃頭より階段の東側（右筵道の前）より右左と一階一階足を送りながら数段上る。その後は普通に上り、散華机の前（散華机は道場内に置き、道場内西側には被物机を置く）を通り、東の縁へと進み内に向かう。群立の席へ進行する間、相鈸一人階下にて鈸四ツを突く。この間も鐃一声・螺吹三声を続ける。讃頭群立の席が定まれば合わせ鈸をする。

次に、相鈸登階、讃頭と同じ場所より登階する。その間は讃頭一人にて鈸四ツを突く。相鈸は讃頭の東へと進み内に向かい、席定まれば合わせ鈸をする。鐃持は鐃打に随い、共に登階して群立の席に於いて東の後方に位置する。

群立

讃衆の浅薦より登階（階の両側より二行に登階、道場正面大床で薦次を合わせる）して東へ東へと立ち、皆内（道場）に向かって立つ。鐃持は鐃打と共に登階する。

次に、持金剛衆の浅薦より登階（階の両側より二行に登階、道場正面大床で薦次を合わせる）して被物机の前を通り、正面西柱の西側に外に向かって半数が立ち、次の半数の持金剛衆は前半数と対向するように、内に向かって西より東へと順次並び立ち、持金剛衆の最浅薦と最上薦とが向かい合い、毛抜き（輪作り）群立する。

従儀師は頃合いを見て登階、大床、もしくは道場内で佇立する。

大阿佇立、十弟子所作

持幡童は階下に立ち止まる。大阿も階下に暫く佇立する。

十弟子は持幡童の外を経て登階、今般は大床の上に於いて縫わず、一薦は据箱を左の脇机へ、二薦は香呂箱を右の脇机へ置き立ち帰り、持幡童より玉幡を受け取り大壇の左右に立てて所定の場所に着座する。

持幡幢は筵道の外側に東西に分かれ、対向して従儀師の横に並ぶ。大傘も同じ。

大阿入堂・登礼盤

大阿は十弟子の所作が終わるのを見て登階入堂。先ず礼盤の前にて蹲踞、桧扇を右の脇机と礼盤との間に置き、右脇机の香呂箱の中の香呂を右手にて取り、左手の念珠、五鈷を取り具して柄香呂を添えて持ち立座、三礼する。次に、また蹲踞して香呂を箱に収めて、少し左に寄り、草鞋を左脇机の方に向けて脱ぐ。次に、また蹲踞して座具を少し向こうへ押し遣り、横被を半畳に打ち掛けて登礼盤する。

従僧は大阿とともに登階入堂し、袈裟、草鞋を御直しして所定の場所へ下がる。

承仕の合図にて楽人は奏楽を止める。

持金剛衆入堂・無言行道

大阿の五鈷が脇机（或いは金剛盤）に少し音高く置かれる音を聞き、従儀師は入堂を促す。

持金剛衆は浅薦より入堂、大壇正面にて一揖、右手で桧扇を胸に挿し、その手で左手の独鈷を右手に持ち換え、不動慈救咒を微音に唱えながら後三匝（大壇と本尊の間を三度順廻りに通過）する。

独鈷の持ち様は、右袖の中で右手の大頭指で独鈷の中程をつまみ持ち、残りの三指で握るように持つ。独鈷の先がわずかに袖から出るように右腰に按じて行道する。この間、独鈷を左右に回して加持したりしてはならない。

三匝終われば各々座に至り、大壇に背を向けて佇立し、独鈷を左手に持ち替えて胸の桧扇を右手に持して着座する。尚、今般の法会は奥上薦とする。

着座の仕方について、先ず、蹲踞して右手で標板の上に扇を置き、一緒に持って立ち上がる。次に、右の草鞋を脱ぎ、右足にて草鞋と草鞋の間を割って板敷に足を下ろし、左の草鞋を脱ぎ、左の草鞋の外側の板敷に左足を下す。次に、右足、左足と座に上

がり、左方は逆に廻り、右方は順に廻り（本尊に背を向けないようにする）正座する。

着座すれば、直に標板を座の右側（右膝外側斜め前あたり）に置き、右手の桧扇で草鞋の踵を押し、外側に半回転させて左の草鞋、右の草鞋と向きを正し、草鞋の間を少々開けて桧扇を標板の上に置き、衣体を整えて総礼まで待つ。

讃衆入堂

持金剛衆の三、四口が着座する頃、讃頭、相鈸は鈸四ツ突き、直ちに上げ鈸三ツを大きく突き上げ、鐃打は梍を、讃頭、相鈸は鈸を鐃持に渡す。

讃衆は念珠・桧扇を取り出し、上蔟前に入堂し、大壇正面に於いて一揖して各自の座坪に着座する。着座作法は持金剛衆と同じであるが、讃衆は三匝行道しない。

威儀師は職衆入堂まで階下にて待ち、讃衆入堂の後に登階入堂する。

鐃持は群立位置にて待ち、従儀師入堂の後、堂童子に鐃鈸を渡して所定の場所へ下がる。

金棒・螺吹・持幡童・庭の諸役は階下にて待ち、従儀師入堂の後、所定の場所へ下がる。

威儀師・従儀師は下陣左側に外へ横一列に並び、従僧・十弟子・堂童子は下陣右側に外へ横一列に並んで着座する。

総礼

大阿が柄香呂を取られるのを見て、威儀師は「総礼（乙）、総礼（甲）」と二声催す。

職衆は起居礼三度行う。桧扇を取って胸に挿し、蹲踞して金剛杵を両の大指と頭指の間に挟み持ち、横被の下で金剛合掌して立座、本儀は起居礼をするのであるが、近来は中礼三度する。終わって元の如く居直して桧扇を置く。この後に護身法。大阿は職衆の起居礼の間、胸の前に柄香呂を捧げ持つ体をなす。

総礼の後、堂童子は柄香呂を唄士の下に持参する。

大阿驚覚鈴・法要金

大阿は、焼香・塗香・浄三業・三部被甲護身・加持香水以下、金剛持遍礼までの前方便の後、堂童子が座に戻る頃に驚覚鈴、常の振鈴の如し。但し緩やかにこれを振る。次に大阿、左手に念珠、五鈷を取

り、右手に香呂を持つ。

磬役はこれを見て磬二丁を打つ。法要の金なり。

唄

唄士は法要の金を聞いて半跏座にし、桧扇で草鞋を左右に開き踵を合わす。右手で柄香呂を取り、念珠、金剛杵を持つ左手を添えて、云何唄を発音する。二句目を唱え終われば柄香呂を左手で持ち、少し上にかざして振香呂をし、柄香呂を香呂箱へ戻す。この時に柄は外へ出しておく。

散華士はこの合図を見て散華作法をなし立座する。作法は後述。

唄士はその所作が終わるのを見て、再び柄香呂を取り残りの句を引く。唄終われば前の如く振香呂をして合図し、柄香呂を香呂箱に戻して正座に戻す。この時は柄を中に入れる。

堂童子賦華籠

堂童子二人は散華机の下に進み、華籠覆いの帯を左右に押し遣り、覆い絹を向うへ押し遣ってそれぞれ華籠を持ち、左右同時に内陣に入り散華士へ賦す。直に散華机の下に戻って残りの華籠を持ち、再度内陣に入り上藹より次第に華籠を配り、終われば内陣より戻り自席に着く。今般は次第散華に行道があるため唄士にも華籠を賦す。

次第散華

散華士二人は堂童子より華籠を右手で受け取って左手に渡し、右手で荘厳の紐（瓔珞）を中・右・左の順に外に出し、葩を前方に押し遣り両手にて下に置き、念珠、金剛杵を左袖に入れ、その便りに懐寶を出して華籠の手前に置き、華籠を持ち桧扇を胸に収めて草鞋を着け、二人同時に大阿の後方より内陣を出て道場入口に進む。右手に座具、左手に柄香呂を持つ堂童子と共に蹲踞し、堂童子の右手より差し出される座具を左手の頭中指の間に挟み、右手で柄香呂を受け取って立ち上がり、再度内陣へ進む。

堂童子は右手に座具、左手に柄香呂を持ち、散華士と共に蹲踞、右手の六ツ折の座具（大阿用は四ツ折）を手のひら側は短く、手の甲側は長くして大頭指の間に挟み、散華士の左手の頭中指の間に挟み込む。次に、左手に持ちたる柄香呂を右手に持ち替え、柄香炉の台座を左手掌に置き、右手に持つ柄香炉の

柄を逆回しにして散華士の右手に差し出す。終われば元の座に戻る。

散華士は内陣に至り大壇の左右に蹲踞し、左手にて花籠を左前方の板敷に置き、右手の柄香呂を右前方の板敷に置き、次に左手の座具を胸の前に差し出し、右手にて向こうに垂れたる端を板敷に押し左手にて座具を向こうへ投げ、左足にて座具の端を踏み、左手にて中程を取り、右手にてあらかにさっと引き開き、上の方が広がらなければ胸の桧扇を抜き出し、打ち払うようにならす。桧扇を胸に挿し戻し、蹲踞しながら右手に柄香呂、左手に華籠を取り、右手を華籠に添え、立ち上がり、胸の前にこれを持ち、後ろ様に二、三、四歩鷁退し、両足を踏み並べて草鞋を離れないようにして、先ず左の草鞋を脱いで足を脱いだ草鞋の外側の板敷を踏み、次に右の草鞋を脱いで脱いだ草鞋の前に出して進み、座具の正中に進み三礼する。

この時、唄士は次の二句を引く。

三礼終わればまた退いて、先ず左足、左の草鞋の外側の板敷を踏み、右足、次に左足と草鞋を着け、再び進んで座具の端を二、三寸ばかり踏み、唄の終わりを待つ。

唄終われば散華士両人同時に発音する。先ず初段の始めより「香華供養仏」に至るまで頭人のみにてこれを唱え、職衆はこの間に念珠、金剛杵を左袖に入れて華籠捌きし、桧扇を胸に挿して右足、左足と草鞋を着け、華籠を両手に持ち各々座前に立つ。頭人唱え終われば直に始めより助音する。よって頭人葩を散ずる時、職衆は散ぜず。職衆葩を散ずる時、頭人は散ぜず。

次に頭人中段全部唱え終われば、職衆またこれを唱え始め、同時に頭人は行道を始め、職衆左方右方と上蔕前二行にこれに従う。

承仕は楽人に奏楽を合図する。楽人は職衆が舞楽台に佇立するまで奏楽する。

従儀師は先頭に立って行道を引率する。

舞楽台の北方に至り、従儀師、頭人は勅使門に向き、残りの職衆は対向して佇立する。

承仕は楽人に止楽の合図をし、楽人は奏楽を止める。

頭人は第三段を唱えて葩を散じた後、職衆の助音より再び行道を開始する。

承仕は再び楽人に奏楽の合図をする。楽人は散華を唱え終わるまで奏楽する。

行道終り頭人等復座すれば、職衆は座の前に立ち、左右同時に後ろ様に左、右と草鞋を脱ぎ、畳の上にて立った後に蹲踞、華籠を標板前の板敷に、桧扇を席札の上に置く。

頭人は行道終わり、前の如く座具の前に立ち止まり、三、四歩退いて草鞋を脱ぎ、更に進みて座具の上に蹲踞し、華籠を左前の板敷に置き、右手に香呂を持ち、左手を添え助音終われば対揚を唱える。

承仕は楽人に止楽を合図し、楽人は奏楽を止める。

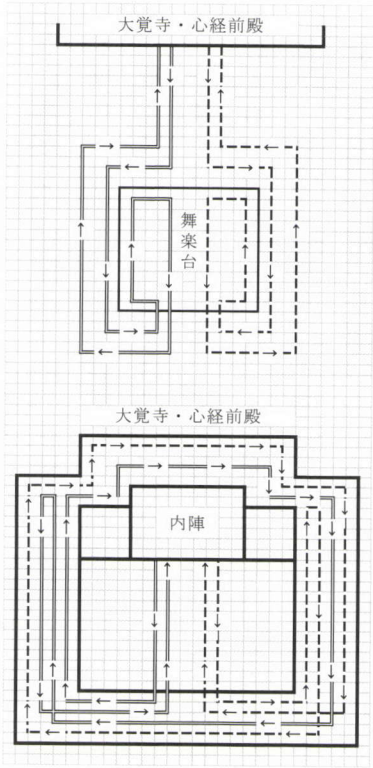
葩は三段とも「供養」にて右手の大頭二指で挟み散ずる。初段一・中段二・後段三の計六枚を用意するが、今般は道場内にて撒くため多く用意する。また、本儀には時花を用いるとある。三段終われば華籠は紐を入れず、踞跪しながらそのまま自席の前に置く。当流では華籠を「ケコ」という。

対揚

散華士は散華終われば踞跪しながら華籠を下に置き、胸から桧扇を取り出して（本来は胸に挿すか）板敷の上に置き、念珠を左腕に一匝にかけ流して唱える。職衆は踞跪しながら華籠を標板前の板敷に置き、桧扇を標板の上に置き、念珠を左腕に一匝にしてかけ、両手を組んで左膝上に置いて起居礼する。次の句からは頭助共に蹲踞して起居礼をする。起居礼の際は金剛合掌して唱える。当流は句数を偶数にするのが習いである。「金剛手菩薩」で座る時、五体投地はせず、少し頭を下げて着座する。

対揚終われば、頭人は懐宝を左袖に入れ、右手に柄香呂、左手を添えて起座、三、四歩退いて草鞋を着け、更に進み蹲踞して柄香呂を右前方の板敷に置き座具を畳む。座具は両手で手前の端を持ち、中央に引き合わせて右手で持ち上げると六ツ折になる。左手の頭中指の間に座具を挟み持ち、右手にて柄香呂、左手で添えるように持ち、内陣を出て道場正面に進み、先ず座具、次に柄香呂を承仕に渡す。但し柄香呂を持ち直し、柄を向こうにして渡す。次に桧扇を取り出して念珠、金剛杵を持ち本座へ還る。

今般の散華大行道は舞楽台の舞台上まで行道するが、雨天時には左の図のごとく心経前殿の周りを行道する。



堂童子撤華籠

堂童子は直に華籠を撤す。先ず散華士よりこれを撤し、次に上臈より次第にこれを撤す。

次に磬役は磬一打。

大阿開眼

大阿が仏眼印明を結誦し終わり、柄香呂を取れば磬役は磬一打。職衆は横被の下の左袖の中で仏眼印明を結誦する。次に、大阿が大日印明を結誦し終わり、柄香呂を取れば磬役は磬一打。職衆は同じく横被の下の左袖の中で大日印明を結誦する。

大阿表白

大阿は柄香呂を取り表白を誦ず。神降しの句（白して言さく）が終われば柄香呂を安めても良いが、「敬って白す」にて念珠、柄香呂を置く。

承仕は楽人に合図し、楽人は奏楽、舞人は調舞を開始する。

堂童子賦分経机

堂童子、承仕は新写の理趣経を机に載せ、一脚ずつこれを持ち、左右に分かれて上臈より賦す。前殿ならば、前机の左右に錐状に経机を人数分積んでおく。

大阿揚経題

大阿は経巻の紐を解き「大楽金剛不空真実三摩耶経」と経題を唱える。当流は二度経題を揚げる。職衆は経巻の紐を解き、少し開いて机の上に置く。

大阿発願

大阿は経巻を左手に持ち柄香呂を取り合図する。

磬役は磬一打。

大阿一切諷誦

大阿は「一切諷誦」と唱えて柄香呂を取る。磬役は磬一打。

職衆読経

大阿・職衆は経巻を披き、理趣経を微音に読経。但し、四、五行程度。

職衆止経

大阿は振香呂にて止経の合図をする。磬役は磬一打。職衆は読経を止めて経巻を巻き、紐を結んで机の上に置く。これ止経の磬なり。

大阿神分

大阿は神分を唱える。磬役は打磬に注意する。承仕は神分終われば楽人に止楽の合図をする。楽人は奏楽を止める。

堂童子撤分経机

堂童子は分経机を撤する。

啓白文

役人は大阿の後方に進み、啓白文を披いて奉読し、終われば所定の座へ戻る。

唱礼

大阿「五悔」を唱える。博士の切り様・助音、頭助の音を極端に重ねないことなど大覚寺の古式に倣う。五大願の時、堂童子は鈸を讃頭に賦す。

前讃

四智梵語・心略梵語・不動讃。讃頭は五大願終われば頭を出す。大阿も共に唱えられる。鈸は十五・三十・二十四を突く。堂童子は第三段の鈸が突き終われば、直ちに鈸を撤する。

初段　／／／／＝／／／＝／／＝／
中段　／＝／＝／＝／＝／　上の突き様を三遍繰り返す
後段　＼／＼／／／＝／　上の突き様を三遍繰り返す

普供養・三力

普供養・三力、頭助を取る。磬役は磬一打。

職衆誦咒

大阿は供養法を修す。職衆は仏眼の咒を誦す。振鈴より両部大日咒、散念珠が終わり一字の磬より一字の咒を誦す。

堂童子は讃頭に鈸を賦す。

大阿振鈴・止咒

大阿は後供養・仏布施の作法をなし、後鈴を鳴らす。職衆は後鈴にて咒を止める。

従儀師は後鈴の頃、承仕に命を伝えて金棒引・螺吹・饒持・持幡童・大傘等、諸役人を階下に調え、筵道を直させる。

後讃

四智漢語・心略漢語・仏讃。讃頭は大阿の後鈴が鳴り止むまで待ち、その後に発音。鈸は返鈸、十二・三十・三十九を突く。堂童子は第三段の鈸が突き終われば、直ちに鈸を撤する。

初段　／＼／／＼／／＼／
中段　／＼／＼／＼／　上の突き様を三遍繰り返す
後段　＼／＼／／＼／　上の突き様を三遍に、左を加える
　　／＼／／＼／／＼／／

後唱礼

普供養・三力・祈願・礼仏、頭助をとる。

廻向

磬役一打。大阿は念珠、柄香呂を取り至心廻向を唱える。職衆一臈は懺悔随喜を発音する。

大阿下礼盤・着新畳台

大阿少しく念珠を摺り終わり、左手に五鈷、念珠を取り、下礼盤して草鞋を着けて柄香呂を取り三礼、柄香呂を箱に収め桧扇を取って立ち、大壇乾の奥に設けた新畳台（曲禄）に着かれる。

従僧は内陣へ進み、大阿の袈裟等を御直しして所定の場所へ下がる。

十弟子は一藹据箱・二藹香呂箱を持ち、大阿の両側に外陣を向いて着座し、それぞれ持ち物を膝の前に置いて立座、所定の場所へ下がる。

誦経導師登礼盤

大阿が新畳台（曲禄）に着座すれば、堂童子一人は磬役の前に至り磬台を右手、磬台と折釘の撞木を左手で合わせ持ち、右脇机のところで右脇机を撤し、その跡に磬台を置き、脇机を持って退下する。堂童子一人は誦経導師の香呂箱を持参して、磬台の下に置き退下する。

次に、誦経導師は香呂箱を置くのを見て、右手に桧扇、左手に念珠、金剛杵を持って起座し、草鞋を着け礼盤の下に至って蹲踞する。桧扇を磬台と礼盤の間に置き、次いで柄香呂を右手で取り、起居礼一度して柄香呂を香呂箱に仮置き（柄尻を外に出しておく）して立つ。

次に二、三歩鷁退して草鞋を脱ぐ。（脱ぎ方は左へ少し寄り、右、左と横に脱ぐ。もし貴人いる時は右に寄って脱ぐ。真直ぐに登りて半跏座にすることもあり。）次に礼盤の下に至り、横被を礼盤に打ち懸けて登礼盤する。

先ず、右方の闕伽等を奥へ押し遣り、表白を取り出して上紙を懐中し、中身をその後に開いて置き、左手で柄香呂、右手で撞木を取って磬二打甲乙と打ち、撞木を前供養の塗香器と華鬘器の間に指し置く。

次に、右手で柄香呂を取り、蹲踞して三礼を唱える。三礼常の如く終わって磬一打して、柄香呂を香呂箱に返す。次に、安座して衣文繕い（整える程度）をなし、再び柄香呂を取って中唄を唱える。「一切法常住」の時、磬一打する。

誦経導師表白

誦経導師は柄香呂を持ったまま表白を唱える。神降しの句（白して言さく）が終われば柄香呂を安め唱えても良い。

堂達作法

先ず、堂達は草鞋を着け起座、道場正面まで進み威儀師より諷誦文を受け取る。承仕は事前に幄屋から諷誦文を持ってくる。この時、桧扇を懐中し文を受け取り胸の前で右手に持す。威儀師は諷誦文の上紙を撤して渡す。

次に、誦経導師の景気の句（観れば夫れ）に至れば、誦経導師の後ろで恭しく一揖、誦経導師の右後に蹲踞し、文を持ち替え、逆回しに元を誦経導師の方に向けて手渡す。（誦経導師は何気なく右手の掌を仰げて肩の上に差し出し受け取り、左手の柄香呂に添えて持つ。）渡し終れば桧扇を取り出し本座に復す。

巨鐘

威儀師は大床より承仕に誦経の鐘を二声催す。「御誦経の鐘」とも呼ぶ。中啓を高く差し上げ、半円を描くように合図する。

承仕はこれを受けて巨鐘三度撞き鳴らす。巨鐘なき場合は導師が磬三打、甲乙甲と打つ。

誦経導師は巨鐘の音を聞き、諷誦文を開いて微音に読む。読み終われば巻き戻し、左手に持って磬一打する。

発願・四弘・仏名・教化

仏名の時、柄香呂を置いて如意を取る。この間、諷誦文を置くか持つかは誦経導師の意楽である。

引被物

被物士は道場正面の被物机へ行き、畳んである白衣を持ち上げ、左手を仰げて小袖の襟を自身の前になし、袖の下の方を手の先にして襟の方を前に打ち掛け、袖を左手の上に載せて、袖の下の辺りを上げて肩の通りに指し上げ、左手を指し延べて袖口の方を持ち、右手を覆せて、手の先を下して裾の方を取り、右の脇に押し当てて抱え持つ。

仏名にかかった時、被物士は大壇の東側より艮に至って西に向かい、先ず右膝、左膝の順に屈して蹲踞し、次に、右手に持つところの裾を左の方に払い返し、左手に持ちたる襟の方を右手の方に折り返し、右手に移し、次に左手で裾の方を引き直し、右手を延ばして襟の方を置く。つまり、襟が北、裾が南になるように引く。敷き終われば中啓を右手に取り、乱れているところを延ばすか、久の字を書く体をなして整える。終われば右手に中啓、左手に念珠を持ち、少し導師の方を見上げ、一揖した後に退出する。

誦経導師は被物を一瞥（いちべつ）する。

教化の終わり頃、被物士は被物を引き下げる。先ず、被物の前に蹲踞して中啓を胸に挿し、念珠を左袖に入れ、右手で襟、左手で袖口を持って左肩に打ち掛け、右手で曲がっているところの内側に手をやり、右の方に払い返し、右手を覆い脇に挟むように持ち、左手で襟の下を持って立ち上がり退出する。

乞呪願

堂達は仏名の終わり頃、右手に桧扇、左手に念珠を持って起座し、導師の後ろに蹲踞する。先ず、桧扇を胸に挿し、念珠を左袖に入れ、誦経導師が諷誦文を渡すのを待つ。

誦経導師は右袖の下より何となく堂達に手渡す。

堂達は右手で諷誦文を受け取り胸の前に捧げ、左手念珠二匝にして起座、呪願士の前に至り、そのまま蹲踞して呪願を乞う。「敬礼常住三宝嘆仏呪願」と微音に唱える。

呪願士は横被の下の左袖の中で金剛合掌し、微音に「三宝境界不可思議恒沙劫中讃揚難尽」と唱え、

互いに小揖する。

堂達は起座し、導師の後ろに右（礼盤と磬台の間）に寄って本尊の方に向い立ち、諷誦文を開き捧げて微音に読む体をなす。読み終われば、右手の方を左肩に打ち掛け、左手で巻き、二つ折りにして懐中し、左手に念珠二匝、右手に桧扇を持ち本座に帰る。

廻向

誦経導師は堂達の着座を見て「廻向大菩提」の句を出し、磬一打して撞木を折釘に掛け、柄香呂を置き、祈念して下礼盤する。草鞋を着け、蹲踞して柄香呂を取り三礼する。柄香呂を香呂箱に戻して右手に桧扇、左手に念珠、金剛杵を持って立ち上がり、小揖して本座へ還る。

堂童子は香呂箱を撤す。

還列

堂童子は鐃鈸を持ち降階、階下に控える鐃持に鐃鈸、撞木を渡す。本来はそのまま砂地へ進み、加列するが今般はなし。

十弟子二人は玉幡を取り降階、階下にて持幡童に玉幡を渡す。再び登階して内陣へ進み、一薦は据箱、二薦は香呂箱の順に法具を取る。

従儀師は十弟子が法具を取るのを見て列を催して出堂、降階して還列に備える。

承仕は楽人に合図し、楽人は奏楽を開始する。

職衆は標板を残し、右手に桧扇、左手に念珠、金剛杵を持ち起座し、讃頭、相鈸以下、浅薦前一行に道場正面大床に進む。大床より浅薦前に二行に降階、讃頭両人鈸を階下にて受け取り筵道に移る。讃頭、相鈸は進列時と逆の筵道を歩く。以下職衆も同じく進列と逆の筵道を歩く。作法は上堂の時の如し。

従儀師は大阿が加列し、舞楽台に立たれるのを見て気色を示す。従儀師、讃頭、相鈸は対向し、諸衆は行きなりに立ち止まる。

承仕は楽人に合図し、楽人は奏楽を止める。

従儀師は讃発音を催す。鈸三段（今般は三十）反音の鈸四ツ突き、互いに小揖して列を引き進む。鐃一声、法螺三声、再び奏楽を開始する。

幔門の下に至れば諸衆は対向、職衆は後ろに下がり薦より降りる。

承仕は中幔門を撤し、金棒引、螺吹、従儀師、持

幡童を通せしめ、十弟子・大傘・従僧は大阿に随いて進み、大阿が対向する職衆の間を通られる頃、讃頭、相鈸は鈸を突き上げ、鈸を鐃持に渡す。鈸の突き上げを聞き、楽人は奏楽を止める。

預は幔門の外で螺吹の法螺、持幡童の玉幡、鐃持の鐃鈸を受け取る。必要あれば庭机を出す。

職衆は上蔦前に薦に上がって幔門へ進み、草鞋を脱ぎ草履に履き替えて上蔦前一行になり、勅使門の外側で立ち止まり列を調える。

金棒引　螺吹　従儀師二蔦・庭　鐃持　持幡童
金棒引　螺吹　従儀師一蔦・堂　鐃持　持幡童　大阿

従僧　十弟子二蔦・香
大傘　十弟子一蔦・据　持金剛衆　讃衆　威儀師

諸衆は列が整えば集会所へ向けて進行を始める。玄関前に至り、金棒引・螺吹・鐃持・持幡童は対向し、従儀師は集会所、十弟子、従僧は大阿に随い控室へ入る。職衆も上蔦前一行に集会所に入り、庭役は退下する。威儀師は職衆、従儀師が着座すれば挨拶し、法会を終えて解散する。

衣体

大　阿／緋袍服　衲衣　表袴　本帽子　桧扇
　　五鈷　本装束念珠
持金剛衆／紫素絹　衲衣　表袴　半帽子　桧扇
　　独鈷　半装束念珠
讃　衆／紫素絹　衲衣　表袴　半帽子　桧扇
　　半装束念珠
威儀師／紫素絹　紋白　指貫　半帽子　中啓
　　半装束念珠
従儀師／黒素絹　紋白　法袴　半帽子　中啓
　　半装束念珠
承　仕／黒素絹　紋白　中啓　半装束念珠
金棒引／白丁
螺　吹／黒素絹　紋白　中啓
持幡童／稚児装束
十弟子／白袍服　平袈裟　表袴　桧扇
　　半装束念珠
従　僧／改良服　折五条
大　傘／改良服　折五条

法具・荘厳

集会所／席札（職衆分）　張文（二枚）
山水屏風（一隻）　新畳台　草座
～新畳台、草座の替わりに緋毛氈、
赤座布団も可～
据箱　香呂箱　柄香呂　如意

庭上／幄屋（一張）　曲禄（一脚）　庭机（三脚）
誦経物　諷誦文
幔門　幔幕（三張）　門柱（六本）
綱（十米）　平幡（四旒～八旒）
糸旗（四旒～八旒）
龍頭竿（八本～十六本）
薦（五十米×三枚）
伝薦（十米×二枚）　金棒（二本）
法螺（二口）　玉幡（二旒）　鈸（一双）
鐃（二口）　棓（二本）
草鞋・鼻高（大阿、職衆、威儀師、
従儀師分）

道場外／誦経机　被物机　散華机
華籠覆　地敷　華籠帯　華籠（職衆分）

座具（大阿一枚、散華士二枚）
香呂箱（唄士、誦経導師用）
柄香呂（三合）　如意　被物

道場内／標板（大阿、職衆分）　新畳台　草座
～新畳台、草座の替わりに曲禄も可～
玉幡立（二組）　経机経・巻物（職衆分）
磬　撞木　曼荼羅（金胎）

大壇／四面器　右脇机　五種鈴　輪法
羯磨　華瓶　壇線（胎）　壇敷
大仏供　色仏供　綵帛　二十種薬
名香包　含香包　仏布施

舞楽附大曼荼羅供披露文

一、御披露申します。

一、今般の大曼荼羅供は庭儀舞楽附き、咒立誦経別行にて執行仕ります。

一、集会所の席は大阿様の左方を以って上薦といたします。

一、職衆は右手に扇、左手に持金剛、念珠をお持ちなされませ。

一、「列、列」と二声催しますれば、先ず讃頭、相鈸、次に讃衆、持金剛衆と何れも右左右左と切込み、浅薦前一行に厳重に立列なされませ。

一、大阿様別室より加列。十弟子一薦据箱、二薦香呂箱を持ち、大阿様に随い二行に加列なされませ。

一、職衆は玄関より草履を着用、一行にて進列なされませ。尤も道場正面より草鞋に履き替えなされ、左右の筵道を二行にて進行なされませ。

一、大阿様は讃衆、持金剛衆に続き、中筵道を進行なされませ。

一、大阿様舞楽台に佇立なされる時、従儀師、金棒引、螺吹、讃頭、相鈸は対向、職衆は行きなりに佇立なされませ。

一、讃頭の御方、讃を催しますれば発音なされませ。尤も鈸は一讃唱えて三十を御突きなされませ。反音の後四ツ突き、正面に向き進行なされませ。

一、職衆道場階下に至れば讃頭相鈸合せ鈸、先ず讃頭登階。次に讃頭相鈸合せ鈸の上、相鈸登階。次に讃頭相鈸合せ鈸の上、讃衆より浅薦前二行に登階。尤も讃衆は東の大床に六口一列内に向い、持金剛衆は西の大床に浅薦七口は外に向い、上薦七口は内に向かい毛抜き合せに群立なされませ。

一、大阿様階下に佇立なされる時、十弟子一、二薦は持幡童の外側を経て登階、縫わずに入堂し、各々持物を左右の脇机に置いて立ち帰り、玉幡を受け取り大壇の両側に立て、控席に着座なされませ。

一、大阿様御入堂、登礼盤の後、五鈷を置かれる音を聞き持金剛衆浅薦前に入堂、無言行道なされませ。

一、持金剛衆の三、四口着座される頃、讃頭相鈸は揚げ鈸三ツ突き上げ、讃衆上薦前一行に入堂、直に着座なされませ。

一、職衆、入堂、着座の後、大阿様柄香呂を取られるのを見て「総礼、総礼」と二声催しますれば、職衆総礼なされませ。

一、唄士の御方、磬二打を聞き唄発音なされませ。尤も作法は振香呂にてなされませ。

一、散華士の御方、堂童子より華籠を受け取り先ず座具、次に柄香呂を受け取り、大壇の両側にて作法なされませ。尤も散華行道は舞楽台までお進みなされませ。

一、対揚は頭助ともに起居礼なされませ。尤も入句は「歴代尊儀　増進佛果」「勅封心経　開封奉賛」とお唱えなされませ。

一、大阿様開眼、表白に続き経題を二度揚げられるのを聞き、職衆微音に経を読誦、止経の鐘にて読経を止め、経巻を元の如く経机にお置きなされませ。

一、大阿様神分の後、啓白文の御方、啓白文をお読みなされませ。

一、前讃は三讃、鈸は十五、三十、二十四をお突きなされませ。

一、職衆、普供養の金より仏眼咒、振鈴より両部大日咒、一字の金より一字咒をお唱えなされませ。尤も、大阿様の後鈴にて咒をお止めなされませ。

一、後讃は三讃、鈸は返鈸にて十二、三十、三十九をお突きなされませ。

一、大阿様下礼盤、別座にご着座の後、法具を調え了りますれば、誦経導師の御方、登礼盤なされませ。

一、堂達の御方、表白の途中にて跪座、威儀師より諷誦文を受け取り、景気の句の時、誦経導師にお渡しなされませ。

一、被物士の御方、仏名の始めに被物をお引きなされませ。

一、堂達の御方、仏名の途中にて起座、誦経導師より諷誦文を請け取り、呪願士の前に進み、咒願を乞うて後、誦経導師の後にて微音に読み、懐中して自席にお戻りなされませ。

一、還列は浅薦前二行で道場階下まで進み、鈸を受け取り、進列の如く舞楽台にて讃発音なされませ。

一、職衆幔門に至れば讃頭の御方、鈸を突き揚げ、大阿様を先頭に上薦前にて草履に履き替え、集会所へお引き取りなされませ。

勅封般若心経中日法会大曼荼羅供啓白文

謹み敬って真言教主摩訶毘盧遮那如来　金剛胎蔵両部曼荼羅諸尊聖衆　殊には心経殿に安置し奉る嵯峨天皇宸翰勅封般若心経　薬師如来　本尊五大明王　別しては高祖弘法大師三国伝灯諸大阿闍梨耶　当山鎮守五社明神　総じては仏眼所照一切三宝に帰命し奉る

爰に謹んで平成三十年嵯峨天皇宸翰勅封般若心経戊戌開封法会中日大曼荼羅供を厳修するに当たり　大悲胎蔵生十一院曼荼羅　金剛界一会七十七尊曼荼羅を掲げ　聊か香華を設けて供養し奉る　九識の心王は乗蓮の相を示し　五智の法帝は坐月の貌を現す　点塵の身雲　恒沙の心数　周遍に囲遶せられ　慧剣、縛を断じ智宝、福を与う

正に今　仏恩を報じ奉らんが為　二十口の浄侶を屈請じて　恭しく瑜伽の梵唄を奏し　仏徳を讃嘆し　法楽を捧ぐ

仏の恩処に四種有りと説けり　父母　国王　衆生三宝なり

弘法大師曰く「国王は則ち我を安んじ　我を貴くするの徳　高天にも逾えたり」と述べ給い　国王の徳は我ら衆生を安んずるのみならず貴きものと御仁慈賜る恩徳と示さる

仰ぎ願わくは嵯峨天皇はじめ当山有縁歴代尊儀　安養浄土の蓮台に遊び　覚行円満にして冥鑑垂れ給わんことを

重ねて乞う

今上陛下　玉體安穏　世子殿下　聖體堅固　天長地久
宝祚無窮
四海静謐　万邦協和　密教紹隆　万民和楽　乃至法界
平等利益

維時平成三十年十一月七日

真言宗長者
大本山大覚寺門跡
真言宗大覚寺派管長
嵯峨御流華道総裁
大僧正　黒沢全紹　敬白

職衆との集合写真

諸役との集合写真

道場２（心経前殿大壇）

道場１（心経前殿）

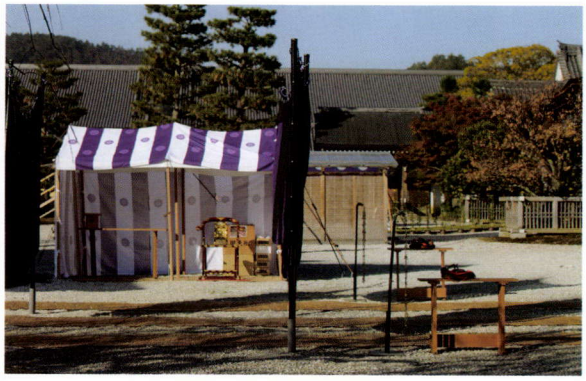
庭儀

道場３（心経前殿御供物）

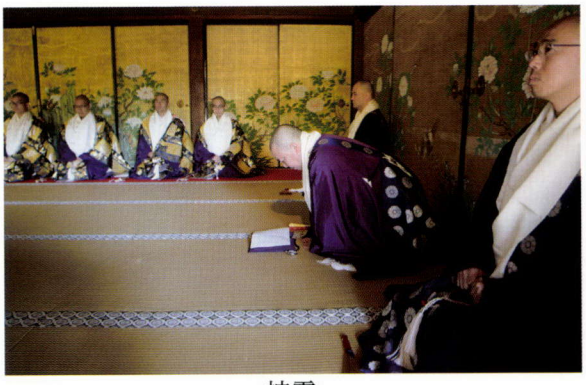
勅使門前

舞楽台

集会１（宸殿）



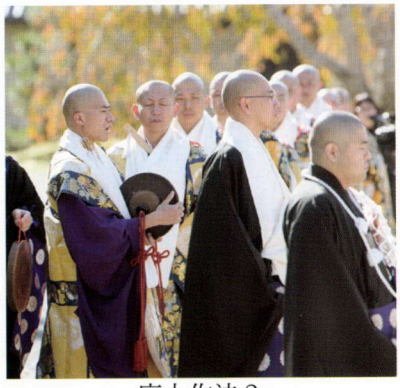
幄屋


披露

集会２（宸殿）

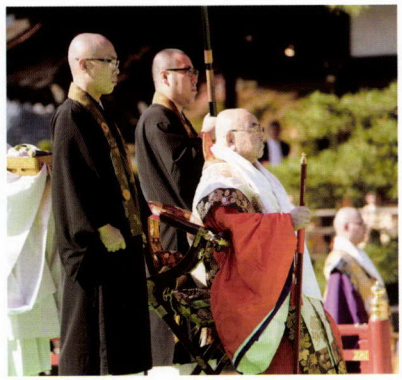
進列２

進列１


庭上作法２

庭上作法１

庭上作法４


庭上作法３

入堂２

入堂１

次第散華（堂内２）

次第散華（堂内１）

次第散華（大行道１）

次第散華（堂内３）

次第散華（舞楽台１）

次第散華（大行道２）

次第散華（舞楽台３）

次第散華（舞楽台２）

散華士香炉受渡１

対揚

舞楽奉納１

散華士香炉受渡２

舞楽奉納３

舞楽奉納２

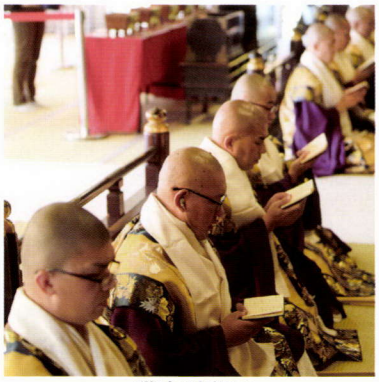
執行長啓白文

理趣経

職衆読経 1

讃

誦経導師


職衆読経 2

堂達

被物士

退堂 1

大阿様修法

還列 1

退堂 2

還列 3

還列 2

威儀師挨拶

還列 4

あとがき

真言宗大覚寺派青年教師会　副会長
衣巻　聡明

この度のサーガラ叢書は、青年教師会結成三十周年記念特別号といたしまして、去る平成三十年十一月七日に厳修されました「勅封般若心経戊戌開封法会」の中日法会「舞楽附大曼荼羅供」についてまとめ、集大成となる資料として作成いたしました。

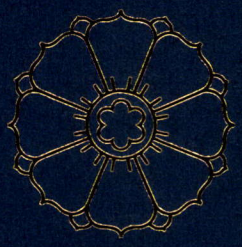
大曼荼羅供の講師として黒沢全匡僧正をお迎えし、五会に亘ってご指導賜りました。懇切丁寧なご説明に加え、非常にわかりやすい資料を作っていただきました。お陰をもって、この中日法会を無魔成満することができました。この場をお借りして感謝申し上げます。今回はその折の資料にそって編集されております。この特別号が後進の方々の一助となれば幸いです。

六十年に一度の法縁に恵まれ、嵯峨天皇さまの大御心に触れ、皆様と共にこの法会に携わらせていただいたことに重ねて感謝申し上げます。これからも嵯峨天皇さまの大御心とお大師さまのみ教えと共にご本山、宗団が末永く発展していくことをご祈念申し上げます。

合　掌

編 集 委 員

喜多村龍秀（福　岡　大悲王院）
野村　昭雄（中　国　日 光 寺）
那須　寛永（九州第一　観 蓮 寺）
荒木　靖雄（徳　島　蓮 光 寺）

サーガラ叢書20号
真言宗大覚寺派青年教師会
結成三十周年記念特別号
戊戌開封法会・中日法会
舞楽附大曼荼羅供について

令和２年12月８日発行
発行所　真言宗大覚寺派青年教師会
〒616-8411　京都市右京区嵯峨大沢町四
大本山大覚寺内
☎０７５－８７１－００７１